

論文

## 子どもの描く「雪だるま」から見る文化の影響 —在日ブラジル人学校とブラジル日系学校での視聴調査から—

塚本 美恵子

**【要旨】** 本研究では、日本で学ぶブラジル人学校の児童生徒とブラジルの日系の学校に在籍する子どもたちを対象に視聴調査を実施した。筆者のこれまでの日米の小学校での調査では、雪だるまが出てくる日本製アニメを視聴後に子どもたちに映像で視聴した雪だるまを描くように指示すると、約4割のアメリカの子どもたちが映像で見た2玉ではなく3玉の雪だるままで描くことがわかり、子どもたちは映像を見たまま記憶するのではなく、文化の影響を受けたイメージを保持していることが明らかになった。そこでこうした映像記憶に見られる文化の影響は、日本で育つ日系ブラジルの子どもたちにも見られるのかを調査し、ブラジル母国の日系の学校に在籍者と比較したところ、日本のブラジル人学校在籍者よりもブラジルの日系学校在籍者の方が、3玉の雪だるまを描く者が有意に多いことが明らかになった。

**【キーワード】** 映像記憶、文化の影響、比較調査、ブラジル人学校、ブラジル日系学校児童、雪だるま

### 1. はじめに

映像は、画像（動画）・音（声）・文字の3つのメディア（媒体）で情報を伝える。映像は文字メディアが中心の教科書よりも提供する情報量が格段に多いことから、子どもたちにもわかりやすく理解しやすい教材として教育の場でも多用されつつある。しかし、子どもたちがどのように映像メディアを理解していくのかといった子どもとメディアの基本的な関係を捉える分析方法と解釈方法については、まだまだ十分に研究されていない。そこで筆者は子どもたちが言葉（音声+文字）を取り除いた映像（動画）で内容をどの程度理解するのかの手がかりを得るために、日米で視聴調査を行った。その結果、子どもたちは言葉が理解できなくてもかなりの高い注視度で映像（アニメ）を視聴していることや、注視度の高いシーンは日米でも同じような傾向を示すこと、さらには「もっとも印象に残ったシーン」は学校毎に異なること

がわかった（塚本2010）。アメリカの調査では、子どもたちが映像に現れた2玉の雪だるまを3玉で描く者がかなりいたことから、これが子どもたちの映像理解のプロセスを明らかにする手掛かりになると考えた。そこでこの点に注目し、再調査を実施した。対象としたアメリカの小学校4年生では、4割近い児童が見てもいない3玉の雪だるまを描いた。一連のこうした調査からは、子どもたちは映像を見たまま記憶（記銘と保持）し、保持された内容を引き出す「想起」「再生」するのではなく、育つ場の文化の影響を受けたイメージを再構成していることが分かった（塚本2013）。映像記憶に見られる文化の影響は、近年、日本でもその数を増しつつある日系ブラジルの児童・生徒にも見られるのかを調べるために調査を行ったところ、3玉の雪だるまを描いた児童生徒は一人も見られなかった（塚本2015）。そこで今回は日本にある南米系外国人学校のブラジルクラスを追加し、ブラジル本国の日系学校4校で学ぶ子ども

たちとの結果を比較分析することにした。

## 2. ブラジルの日本移民の歴史と日系ブラジル人

今回、調査対象校として協力を得たのは、日本の外国人学校2校と、ブラジルにある4校の日系の学校である。各校紹介の前に、今一度、ブラジル移民の歴史と日系ブラジル人の状況を少し確認しておこう。

### 2.1 日本移民の歴史

世界にはブラジルだけではなく、ハワイ、アメリカ、中南米などに多くの日系人社会が存在する。そして今、リーマン・ショック以降その数は減少したといえ、ブラジルやペルーなど南米から日本に働きに来ている日系人の数は多い。彼らは、ブラジルやペルーに移民した日本人の子孫である。なぜブラジルに多くの日系人がいるのだろうか？ハワイ、アメリカ、ブラジル、ペルーなどに日本から移り住んだ移民の多くは、時の政府によって大規模な移住を促進する政策がとられたことから住み慣れた日本を離れて移民となった。こうした歴史的背景や経緯を、サンパウロ人文科学研究所のホームページ「ブラジル日系移民」は以下のように紹介している。

#### 初期のブラジル移民

1970年代に至るまで、日本から北米・南米大陸をはじめとする国々へと大規模な移住を促進する政策が存在していたことは、今日、多くの日本人によって忘れられつつある。明治期の近代化は、国内に人口増加率の急激な増加をもたらしていたが、1877年の西南戦争以後の経済の大きな混乱によって、地方農村が荒廃すると、人口問題と農村の危機の解決策として、自国民を他国に送出し、現地での就労によって、富を蓄積するよう奨励することを目的とした移民政策が実施されるようになった。1868年にハワイ王国への最初の移民が始まって以降、日本国内の移民会社は増大し、移民促進論が政治的課題として議

論されることになった。しかし、北米を中心に東洋人に対する移民反対論が強まると、多くの人々は、南米を目指すようになる。その最大の受け入れ国は1888年の奴隷制の廃止によって、農業分野における労働力の不足に悩んでいたブラジルであった。

1908年に移民船「笠戸丸」でサンパウロのサントス港に到着した781名をはじめとして、1900年代前半には、多くの日本人がブラジルへと渡り、コーヒーなどを生産する農場の雇用農民として農業労働に従事した。ブラジル内陸地での労働は、収穫、収入の面で、政府の支援を受けた移民会社が国内で行っていた広告の謳い文句とは大きくかけ離れたものであり、数年間の貯蓄の後に日本への帰国を目指す「出稼ぎ」を行う予定だった多くの人々は食料、住居、医療面で過酷な状況におかれることになった。

1920年代に生じた一連の経済危機—米騒動（1918年）、関東大震災（1923年）、金融恐慌（1927年）、大恐慌（1929年）—は、日本国内の農村に大きな打撃を与えた。政府は、1925年から、移民の渡航費用を大きく支援し、大規模な移民を奨励した。1908年から1941年までの間に、18万8千人がブラジルへと移民しているが、1925年から1935年までの10年間の間だけでも、13万5千人がブラジルへと送出されている。この時期は、ブラジル日系人たちから「国策移民の時代」と呼ばれている。

ブラジルへ渡った日本移民たちの中には、1920年代から小作農から自作農になるものも現れ、1910年代以降には、サンパウロ市を中心として都市にも進出していく。しかし、1937年に国家主義者ジェトゥーリオ・ヴァルガス（Getúlio Vargas）が大統領に就任し、新体制（Estado Novo）を建設すると、日本語学校や日本語新聞の発行が禁止され、日系移民たちの共同体生活は大きく制限された。さらに1941年に日本国が連合国との戦争状態に入ると、ブラジル政府は日本国政府との国交を断絶、ブラジル国内では家庭外での日本語の使用が禁止されたほか、日本人所有の農場、商店、工場、銀行、病院などの一部が政府により接収された。日本国政府官憲がブラジル国内から撤退すると、日本移民たちは本国との連

絡を失い、移民同士の間での情報交換も著しく圧迫された。

この時期の移民たちのおかれた特殊な状況と精神状態は、1945年以降、愛国団体である臣道聯盟の成員を中心として日本軍の戦勝を信じる「勝ち組」の人々と、日本の敗戦の認識を呼びかける「負け組」の間での分裂、及び一部の過激派による一連の暗殺事件の原因となった。

#### 戦後移民と現在のブラジル日系社会

1950年代半ばより日本政府は、戦後の急激な人口過剰への対策を迫られ、その一環として、外務省移住局、日本海外協会連合を設立し、大規模な移民送り出し政策に乗り出した。その結果、1952年から1973年までの間に約6万人がブラジルへと移民することになった。ブラジルの日系移民コミュニティは、これらの移民の流れの中で新しい構成員を得ながら、発展していった。

#### デカセギ移住

1980年代半ば頃、ブラジル経済の不況にあえいだ日系移民1世や2世たちが就労目的での日本訪問を始めた。1990年に日本の「出入国管理及び難民認定法」の改正に伴って、3世までの海外日系人とその配偶者が「定住ビザ」を得られるようになると、日本での就労を行う移住者が激増した。この流れはかつて日本からブラジルへ渡った人々になぞらえて「デカセギ (dekassegui)」と呼ばれた。現在、日本国内には30万人以上のブラジル国籍者が居住しており、愛知県、静岡県、群馬県の工業地帯を中心に、ポルトガル語話者の集住地域が形成されている。

北米や南米への日本移民は、国策として送り出されたにもかかわらず移住先でさまざまな苦難を強いられることになった。アメリカ本土に移住した日系移民も戦時中は敵国民として約12万人以上が強制的に立ち退きを命ぜられ、内陸部の砂漠地帯や人里離れた荒地に作られた全米10ヶ所の強制収容所に送られた<sup>1)</sup>。移民の歴史は、今も昔も政治や経済の動きに翻弄されるなど大きな影響を受けている。

## 2.2 日系ブラジル人

日系移民はその勤勉さと誠実さ、そして教育熱心さから移住先で社会進出を果たし、現地社会の発展に大きく貢献してきた。アメリカへ移住した日本人もその勤勉さと教育熱心さからアメリカで「モデルマイノリティ」と称されるようになったが、ブラジルに渡った日本人移民も、「ジャポネース・ガランチード (信頼できる日本人)」<sup>2)</sup>という肯定的評価を得るようになった。教育熱心な日系人はアメリカ同様、ブラジルでも大学への進学率を上げていった。サンパウロでは、「日系人を一人殺せば、大学入試に合格する確率はその分増える」といった話もあちこちで耳にした。これは1970年代当初にサンパウロ州の人口に占める日系人の比率は2.7%であったにもかかわらず、ブラジルの最高学府であるサンパウロ大学の学生数約の13%が日系人だったことから広まったブラックジョークである (小嶋 2007)。

ブラジルで確固たる位置を築いた日系人だが、小嶋 (2007) によると「新しいアイデンティティとしてのニッケイ 日系人という場合、あくまで日本人の側から見た、海外の日本人移住者やその子孫の総称を指しており、その多様性は全く考慮されていない。しかし、ニッケイ・アイデンティティは、その当事者による自己定義であり、獲得していくものとしての性格を備えている。日本人から見て日系人という範疇に入る人が、すべてニッケイになるわけではない」という。ブラジルの日系人たちは、1980年代以降の日本へのデカセギといった社会現象、インターネットなどによる日本からの情報の流入、日本企業のブラジル進出などさまざまな契機で日本との交流が深まることで、日本文化に触発されて日本文化を吸収しつつも、一方で自身のもつ文化が日本文化とは異なることにさまざまな場で気づかされることになる。「ニッケイ」あるいは「日系人」のもつ日本文化は、ブラジルで、あるいはアメリカで、その土地や社会・時代のもつ文化と融合し、その子どもたちによって次々と新しいニッケイ文化が形成

されている。

ブラジルにおける日本語教育の状況を報告している江原(2007)は、日系の家庭でも1970年代から日本語を話す環境が失われ、戦後60年以上経過した日系社会は日本語を話すことができない人が多くなったと報告している。こうした状況下でも日本語を学ぶ場所として日本人会などが経営する学校や「日本語学校」が大きな役割を果たしており、JICAも「継承語」として日本語に対する教育支援を行っている。

### 2.3 サンパウロ地区の日系コミュニティ

ブラジルは世界最大の日系人居住地であり、約140万人<sup>3)</sup>~150万人<sup>4)</sup>にのぼると推定される日系人口の70%の100万人がサンパウロに住むという。サンパウロ市の中心部に隣接するリベルダージ地区は、日本人街として知られ、朱塗りの鳥居や日本庭園があり、駅前広場では仙台七夕祭などのイベントが開催され、週末ともなると多くの市民でにぎわう。ロサンゼルス(アメリカ)の日本人街として有名なリトル・トーキョーと並び、世界最大規模の日本人街となっているリベルタージ地区だが、2004年には中国や韓国等アジアからの移民の転入により正式名称が「日本人街」から「東洋人街」へと改名されている。それでも街を歩くと、日本語の新聞や暦が販売され、店の看



図1. リベルダージ地区で売られている日本語新聞

板には日本語が多くみられ、店頭には大相撲の取り組みなど日系人コミュニティ向けポスターが数多く貼られていた。

## 3. 調査対象校紹介と実施時期・対象人数について

今回の調査に協力いただいたのは、国内の調査では、岐阜県大垣市にあるHIRO学園、静岡県浜松市にあるムンド・デ・アレグリア校、またブラジルでは、サンパウロ市内の日系のO.E.N.保育学園、赤間学院、サンパウロ州郊外のスザノにあるセニプラス校、それにジャカレイ日本語学校である。江原(2007)はブラジルの日本語教育を類型化し、「公教育内の日本語教育」と「学校以外の教育機関」に分けているが、O.E.N.保育学園、赤間学院、セニプラス校は前者で、ジャカレイ日本語学校は後者である。またブラジルでは筆者が訪問した赤間学院、セニプラス校、ジャカレイにはJICAから派遣されたスタッフが日本語の授業を担当していた。まずは、視聴調査に協力いただいた学校について簡単に紹介する。

### 3.1 HIRO 学園

岐阜県大垣市にあるHIRO学園のホームページによれば<sup>5)</sup>、2000年に私塾として開校した学校で、幼児科から高校3年までのクラスがあり、ブラジル教育省の認可校であると同時に、文部科学省の「我が国において、高等学校相当として指定した外国人学校一覧」にも指定された学校法人となっている。「愛情と思いやりをもった人間性豊かな国際人の育成」を教育目標として掲げているHIRO学園の評判は高く、ブラジルのサンパウロ大学に進学した卒業生は20名を数え<sup>6)</sup>、サンパウロ州立大、ロンドリーナ州立大など有名公立・私立大学への進学者を出している。

教職員は26名で、教師はブラジル人12名、日本人4名、アメリカ人1名で小学校1年から専門教科を担当している。児童生徒数は約250名で、



図2. HIRO 学園校舎



図3. ムンド・デ・アレグリア校の入る建物

ポルトガル語を教授言語とし、少人数クラスで運営されている。年間授業日数は200日、年間授業時間は1080～1200時間で、科目は小学1年生からポルトガル語、数学(算数)、美術、理科、地理、歴史、日本語、英語、体育に加えて、補習(復習)や学級活動が組み込まれている。この他にコンピュータが小学校で選択でき、芸術、日本の社会、科学などの科目は学年が上がるにつれて加わる。市内から通っているのは総児童・生徒数の約3分の1で、3分の2は市外から通学し、遠くは福井から片道2時間かけて通っている児童・生徒もいるという。

視聴調査は2013年8月6日と7日に実施した。調査対象者の内訳は、4年15名、5年17名、6年13名、高2が21名、高3が15名の計81名である。

### 3.2 ムンド・デ・アレグリア校

東海地方にある南米系外国人学校である。「ムンド・デ・アレグリア」とはスペイン語で「歓びの世界」という意味で、2003年に松本雅美校長が日系ペルー人保護者の要望を受けて開校した学校で、2005年からはブラジルクラスも設けている。ブラジルクラスはブラジル本国の教育課程で教育を行っており教授言語はポルトガル語である。

ムンド・デ・アレグリア校のホームページに

は<sup>7)</sup>、「教育に国境はありません」と冒頭に掲げられており、「南米から日本に来た義務教育年齢の日系人の子どもたちに、母国政府の認定を受けたカリキュラムで母国の教師が母国語で、学年に見合った必要な教育を行い、子どもたちに学ぶ喜びを教えること」を目的に運営されている。同校のホームページによれば、松本校長のもと22名の教員がブラジルクラスとペルークラスの教育にあたっている。

ムンド・デ・アレグリア校では、ブラジルの通信教育(テスト)を取り入れており、教科は、算数、理科、社会、母国語、日本語、美術、体育等で、筆者が訪問した時は職員室では高校生3名がブラジル本国の教員とつないだネット授業を受講していた。また2010年には、日本の通信制高校(日本ウェルネス高校)と提携したことにより、ムンド校で母語教育を受けながら、同時に日本の通信制高校の勉強が可能となり、日本の高校課程卒業と同時に大学・専門学校への進学を目指すことができるようになったという。

視聴調査は2014年3月3日に実施した。調査対象者の内訳は4年10名、5年10名、6年11名、7年9名、8年4名、9年4名の計48名である。

### 3.3 ブラジル O.E.N. 保育学園

ブラジルのサンパウロ市内にあるこの学校の歴史は古く<sup>8)</sup>、1932年に「日伯裁縫学校」として開

校し、68年に日本語表記を「O. E. N. 保育学園」とし、2000年3月からは、正式な政府認定の学校として登録された。

生後3か月の乳児から小学高学年までの児童が通うこの学校では、授業では日本語、ポルトガル語以外に情操教育としてソロバン、お習字、絵画をはじめ、バレエ、柔道、将棋などを行い忍耐や集中力を養うことを目指している。O. E. N. 校の幼稚部の授業は日本語のみで、小学部ではポルトガル語で授業を行っており、日本語の読み書きの授業も必須となっているという。年間行事としては、2月入学式、節分、3月ひな祭り、5月こどもの日、運動会、母の日、6月フェスタジュニア、7月敬老の日、8月父の日、10月ハロウィン、12月卒業式がある。

視聴調査は2014年3月10日に実施し、調査対象者の内訳は3年7名、4年6名、5年3名の計16名である。

### 3.4 財団法人赤間学院セントロ・エドカシオナル・ピオネイロ校

サンパウロ市内にあるピオネイロ校<sup>9)</sup>も歴史のある学校である。1933年に赤間夫妻によって開設された「裁縫教授所」を前身とする「サンパウロ裁縫女学院」は、現在、赤間学院セントロ・エドカシオナル・ピオネイロ校として幼稚園から高



図4. サンパウロのO.E.N.校入口



図5. 赤間学園の入口に設置されている石碑

等部まで全校児童生徒数約800名の男女共学校となったが、日系人の間では現在も「赤間学院」の名の方が通りが良いという。日本語を各学年の正課としているほかに、特に数学教育に力を入れ、在校生はサンパウロ州内で行われる数学オリンピックで優秀な成績を残している。

ピオネイロ校の特色としては、日本式の教育でしつけを良くすることや、スポーツにも力を入れ、柔道が選択できる点や、英語は小1から週1時間、小3から週2時間学ぶ点などを特徴としている<sup>10)</sup>。日本語コースは選択科目として学ぶことができ、各クラスは週4時間、年齢ではなく日本語のレベルに分けたクラス編成となっている。同学院では、折り紙で幾何学、ソロバンを使った計算トレーニングを実践しており、これが数学教育に貢献しているという。また、いわゆるデカセギで日本の教育を受けた後ブラジルに戻った帰国子女の受け入れにも積極的である。

視聴調査は2014年3月11日に実施した。調査対象者の内訳は3年8名、6年1名、7年2名、8年2名、の計13名である。

### 3.5 セニブラス校 (Cenibras)

サンパウロ州郊外のスザノの広い敷地に建てられた通称セニブラス校<sup>11)</sup>は、2006年初めに日系団体(汎スザノ文化体育農事協会(ACEAS NIK-

KEY)) によって設立され、公認の私立小学校として認められた学校である。ブラジルの教育改革に従い9年制で、新しい校舎には広いカフェテリアや大きなプールなど施設も充実しており、こうした学内のプールや施設などは会員が利用できるということであった。

学内では子どもたちのポルトガル語が飛び交ってにぎやかだが、図書室にはサンパウロ青年図書館から寄贈された約1万5000冊のマンガが備えられており<sup>12)</sup>、膨大な量の日本語のマンガのコレクションを子どもたちが楽しんでいった(図7参照)。

セニプラス校でも午前中は他の学校同様にコンピュータやスペイン語を含めた必修科目を学び、午後は水泳や日本語、スポーツなどさまざまな活動を選んで参加できる。ほとんどの子どもが午後にも残って日本語を勉強しており、多い子は1週間に10時間、少ない子どもでも5時間勉強しており、その決定はほとんど親がしているという。

視聴調査は2014年3月13日に実施した。調査対象者の内訳は4年9名、5年4名、6年2名、7年1名、8年3名、9年5名、10年1名の計25名である。尚、2年生15名の参加があったが、視聴調査中に児童の出入りがかなりあったことから本データからは除いた。



図6. セニプラス校の校門ゲート



図7. セニプラス校の図書室のマンガ

### 3.6 ジャカレイ日本語クラス

「ジャカレイ日伯文化体育協会」は同市に日本人が入植した1934年に日本人農業者により現文協の母体となる親睦会が結成され、1937年に学校建設を目的にジャカレイ日本人会が誕生し、1970年に各地区の日本人会が団結し現文協が設立された。会員数は約200世帯あり、午後には日系人の子どもたちが集って日本語クラスで学んでおり、成人クラスには現地ブラジルのアニメ愛好者の若者も日本語を学んでいた。

日本語クラスの建物には文協が併設されており、筆者の訪問した際には健康診断があるということで、地元の日系住民が集まっておられ日本語の会話があちこちから聞かれた。

視聴調査は2014年3月12日に実施した。調査対象者の内訳は3年2名、5年1名、7年1名、9年3名、高校1名、18歳2名、19歳2名の計12名である。

## 4. 調査使用教材と調査方法

利用した映像は、宮沢賢治原作のクレイアニメーション『雪渡り』(株)ハリケーンフィルムズ(現/株式会社サイプラス)である。各シーンの内容は1.「プロローグ」では『雪渡り』の意味の説明がなされ、2.「森へ」で主人公(カンコと四郎)

たちが森に行き、そこで狐の作った3.「雪だるま」を見つける。主人公たちは大人たちから聞いた狐にまつわる4.「教訓」を思い出すが、5.「狐との出会い」で狐の紺三郎と出会い、紺三郎から幻灯会の6.「招待状」を受け取る。約束の満月の夜に兄たちに狐の話聞く7.「兄弟との会話」を経て、8.「不思議の森へ」出かけていく。狐の森で開催される9.「幻灯会①」10.「幻灯会②」を見た子どもたちは、狐から出された11.「お団子」を信頼の証として食べ、12.「お別れ」には皆で楽しく踊り、13.「エンディング」で終わる、という13シーンとなる。今回調査の対象としたシーンは3.の「雪だるま」で、主人公のカンコと四朗が森の中で図9で示したキツネがつくったという沢山の雪だるまを見つけるシーンである。

視聴調査は、ブラジル各校では日本語の授業の一環として実施した。調査は、日本語版と英語版を上映し、1回目の視聴後に「今見た雪だるまの絵を描いてください」と指示し、ポルトガル語で書かれた質問紙に雪だるまの絵を描いてもらった。2回目の上映後には、1回目との違いなどを聞き、理由も回答するよう求めた。調査実施時には日本のHIRO学園とムンド校では日本語教員とブラジル人教員がそれぞれの言語で指示をし、ブラジルでは、ブラジル在住の日本語教員が日本語とポルトガル語で指示を伝えた。



図8. セニプラス校での視聴調査

## 5. 調査結果の分析方法と結果

今回の視聴調査で使用したアニメ『雪渡り』は、図9に示したように日本製のアニメで、雪だるまは2玉で描かれている。一方、図10に示した絵は、ブラジルの日系ピオネイロ校の3年女児によって視聴後に「今見た雪だるまの絵を描いてください」と指示して描かれた「雪だるま」の絵である。雪だるまは3玉で描かれており、上映したアニメで視聴した筈の雪だるまとは異なった3玉で描かれている。これまで筆者がアメリカで繰り返し実施してきた調査でも、作品視聴後に子どもたちが描く雪だるまは3玉のものが一定の割合で見られた。例えば日英バイリンガル校、スペイン語英語のイマージョン校、モノリンガルの私立校の3校の小学4年生対象の調査では、3玉の雪だるまを描いた児童の割合は、順に25%、39%、47%と学校により差が確認されたが、全体では38%が3玉で描いた。その後、小学校全学年を対象とした調査を実施しても、一定数の子どもたちが3玉の雪だるまを描くことが確認されている。こうした調査結果を受け、本研究ではこうした映像記憶に見られる文化の影響は日本で育つ日系ブラジルの子どもたちにも見られるのかを調査結果から明らかにするために実施した。分析方法は、子どもたちが描いた雪だるまを「2玉」、「3玉」、「その他」で分類した。「その他」は、雪だるまに足が描かれていたり、キツネ風の絵が描かれている場合などである。

日本のブラジル人学校とブラジルの日系人学校での調査結果を表1にまとめた。

表1では、調査対象者の描いた雪だるまの数を「2玉」、「3玉」、「その他」で分類した。今回の調査に協力してくれた学校を「日本」と、「ブラジル」で分け、背景文化の影響を検討した。表1の上の網掛けにしたのが、日本のブラジル人学校のHIRO学園とムンド・デ・アレグリア校のデータで、両校を合わせると129名のうち118名(91.4%)が2玉の雪だるまを描き、3玉の雪だ





図9. 『雪渡り』の1シーン © サイプレス



図10. 3玉の雪だるま (ピオネイ口校3年生)

るまを描いたのはわずか6名(4.6%)、そしてそれ以外の絵を描いたのが5名(3.8%)である。

表1の下半分はブラジルで調査に参加してくれた日系学校(O. E. N. 保育学園、ピオネイ口校、セニブラス校、ジャカレイ日本語学校)での結果である。2玉の雪だるまを描いたのは4校の合計で46名(69.6%)、3玉の雪だるまを描いたのは9名(13.6%)、その他が11名(16.6%)であった。

表1を見ると、2玉の雪だるまを描いたのは日本国内のブラジル人学校で91.4%であったのに対し、ブラジルの日系学校在籍者では69.6%と割合

が低く、日本では4.6%にしか過ぎなかった3玉の雪だるまを描いた者の割合がブラジルでは13.6%と高くなっている。これらの数値に有意差が認められるかどうかを検討するために、カイニ乗検定を行った結果、ブラジルでは3玉が、日本では2玉が5%水準で有意に多かった。

## 6. 結果と考察

筆者はこれまで主に日米で繰り返し子どもたちの映像視聴調査を行ってきた。その結果から、子

表1. ブラジル各校の雪だるまの玉の割合

国	学校名	対象学年	2玉の人数	3玉の人数	その他	計
日本	Hiro 学園	4~高3	79	0	2	81
	ムンド校	4~9	39	6	3	48
日本	在日ブラジル人学校 (合計)		118 (91.4%) **▲	6 (4.6%) *▽	5 (3.8%) **▽	129
ブラジル	O.E.N. 保育学園	3~5	8	3	5	16
	ピオネイ口校	3~8	12	1	0	13
	セニブラス校	4~10	16	5	4	25
	ジャカレイ校	3~高1 & 19才	10	0	2	12
ブラジル	在ブラジル日系学校 (合計)		46 (69.6%) **▽	9 (13.6%) *▲	11 (16.6%) **▲	66

+p<.10 \*p<.05 \*\*p<.01  
(▲有意に多い、▽有意に少ない、p<.05)

どもたちは映像を見たまま記憶するのではなく、文化の影響を受けたイメージを記憶することがわかってきた。そこでこうした映像視聴における文化の影響は、日本で学ぶ日系ブラジルの児童・生徒でも見られるのかを調査したところ、雪だるまを2玉で描く者はいなかった。今回は、在日の南米系外国人学校をもう一校追加すると同時に、ブラジル本国の日系の学校4校の在籍者とも比較検討した結果、3玉の雪だるまを描いたのは日本在籍者では4.6%であったのに対し、ブラジルの日系の学校在籍者では13.6%と高い結果となった。2玉と3玉の雪だるまの出現率をカイ二乗検定で調べたところ、在日ブラジル人学校在籍者では2玉の雪だるまを描いた者は有意に多く、ブラジルの日系学校在籍者では2玉の雪だるまを描いた者が有意に少ないことがわかった。また在日ブラジル人学校在籍者では3玉が優位に少なく、ブラジルの日系学校在籍者では有意に多いことが明らかになった。

今回の調査の結果から、(1)日本のブラジル人学校在籍者は、日本の子どもたち同様、雪だるまを3玉で描く子どもは少ないこと、(2)ブラジルの日系の学校在籍者は、日本の子どもたちより3玉で雪だるまを描く者が多いことがわかった。

この調査結果からは、ブラジルから来日したばかりの子どもたちの中には、こうしたブラジル文化の影響を潜在的に保持している子どもたちが一定数含まれると予想されることから、映像教材を利用する際には彼らの背景文化への配慮が求められることを示唆するものとなろう。

## 注

- 1) 全米日系人博物館 HP [http://www.janm.org/jpn/nrc\\_jp/accmass\\_jp.html](http://www.janm.org/jpn/nrc_jp/accmass_jp.html)
- 2) 小嶋茂, 日系人からの脱皮—新しいアイデンティティとしてのニッケイ—その1 & その2, ディスカバー・ニッケイ/2007年8月16日 <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/>

2007/8/16/new-identity/

- 3) サンパウロ人文科学研究所のHPの数値では、日系人は140万人とされている。 <http://www.cenb.org.br/cenb/index.php/articles/display/86>
- 4) ブラジル日本文化福祉協会の「ブラジル日本移民史料館」 <http://www.bunkyo.org.br/ja-JP/museu-historico-da-imigracao-japonesa-no-brasil-ja> や、国際交流基金ホームページ「2013年度 ブラジル」の数値ではブラジルの日系人の数は150万人となっている
- 5) HIRO 学園ホームページ: <http://www.ogakivt.ne.jp/hirogakuen/> (参照 2014-11-10)
- 6) ニッケイ新聞 2014年1月8日: <http://www.nikkeishimbun.com.br/2014/140108-71colonia.html> (参照 2014-11-10)
- 7) ムンド・デ・アレグリア校HP <http://www.mundodealegria.org/>
- 8) サンパウロ新聞 O.E.N. 学校概要 10/09/10 <http://www.saopauloshimbun.com/index.php/conteudo/show/id/1514/menu/15/cat/98>
- 9) ディスカバー・ニッケイ 海を渡った日本の教育 第6回 女子教育(2) 根川幸男 2009年8月6日 <http://www.discovernikkei.org/ja/journal/2009/8/6/nihon-no-kyoiku/>
- 10) 江原裕美 2007「ブラジルにおける日本語教育の現状と課題」帝京大学外国語外国文学論集 帝京大学外国語外国文学論集(13)25-62
- 11) 江原 2007
- 12) サンパウロ新聞「マンガ図書館も落成 スザノ市 第4回文化祭り」 <http://www.saopauloshimbun.com/index.php/conteudo/show/id/14391/cat/105>

## 引用文献

江原裕美 2007「ブラジルにおける日本語教育の現状と課題」帝京大学外国語外国文学論集 帝

塚本：子どもの描く「雪だるま」から見る文化の影響—在日ブラジル人学校とブラジル日系学校での視聴調査から—

京大学外国語外国文学論集(13) 25-62

小嶋茂 2007 日系人からの脱皮—新しいアイデンティティとしてのニッケイ—「ディスカバー・ニッケイ\*日本人移民とその子孫」/2007年8月16日

<http://www.discovernikkei.org/ja/journal/authors/shigeru-kojima/>(2015年11月12日アクセス)

サンパウロ人文科学研究所ホームページ「ブラジル日系移民」

<http://www.cenb.org.br/cenb/index.php/articles/display/86> (2015年1月12日アクセス)

塚本美恵子 2010 「アメリカの小学生は日本語版アニメをどう視聴したのか—注視度と質問紙調査の回答から—」文化情報学第17号第2号, 駿河台大学メディア情報学部 p 1-11

塚本美恵子 2013 塚本美恵子編著『子どもたちは何を見ているのか—教育現場における映像教材の活用—』デジタルパブリッシングサービス

ISBN978-4-86143-090-9

塚本美恵子 2015 「映像視聴に見られる文化の影響—ブラジル人学校での視聴調査と学習環境調査結果から—」メディアと情報資源 第21巻第2号, 駿河台大学メディア情報学部, p 1-14

**謝辞**：本調査に際しては、HIRO 学園の川瀬理事長・ソニー校長先生・丸井合先生、ムンド・デ・アレグリア校では松本校長はじめ岡先生・芦澤先生、またブラジルの調査ではコーディネートして下さったジャカレイ日本語学校の木下佳代先生にご尽力いただきました。また、O.E.N. 保育学園、赤間学院、セニプラス校の校長先生や先生方、そして子どもたちご協力をいただきましたことをここに改めて感謝申し上げます。

○本研究は科学研究費（課題番号 22610016 「映像メディアによる教育課題向上に関する研究」）を受けています。

**Cultural Influences on Children's Drawings of Snowmen:  
A Comparative Study of Brazilian Schools in Japan and Japanese Schools in Brazil  
By Mieko Tsukamoto**

**[Abstract]** This study reports the result of an audio-visual survey conducted between Brazilian schools in Japan and Japanese schools in Brazil. Following extensive audio-visual surveys in both Japan and northern California, the author found that about 40 percent of the U.S. 4th graders drew 3-ball snowmen after watching a film portraying one, which supports the idea that children store visual images in their memory. Furthermore, the children were found to reconstruct images after watching the film not only using their immediate perceptions but also relying on cultural influences. A comparative study of Brazilian schools in Japan and Japanese schools in Brazil showed that the proportion of children who drew images from immediate perceptions and those who drew images reconstructed from cultural influences indicated significant differences between those living in Japan and those living in Brazil.

**[Key words]** visual memory, cultural influences, comparative study, Brazilian school, Japanese school in Brazil, snowman